

第2 教育研究団体の意見・評価

○ 全国歴史教育研究協議会

(代表者 南 和男 会員数 約16,200人)

T E L 0422-51-4554

今年度の大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）について、高等学校において授業を行う立場から、1の「はじめに」では本試験「日本史A」と「日本史B」の今年度の平均点など一般的な概略について、2の「試験問題の程度・設問数・配点・形式等」では問題の内容・程度・設問数・配点・形式などの科目別の意見や要望について、3の「まとめ」では全体的な要望について述べる。

1 はじめに

平均点は、今年度は「日本史A」40.97が点、「日本史B」が52.81点であった。前年度に比べて平均点は「日本史A」が8.6点下がり、「日本史B」が11.45点下がった。これにより、「日本史A」と「日本史B」との差は14.69点から11.84点に縮小された。「日本史B」との共通問題である第2問と第4問は「日本史A」を高等学校で学習してきた受験者にとって、今回は比較的解答しやすい内容であったと思われる。例年要望していることであるが、「日本史A」と「日本史B」との平均点の差ができるだけ縮小されるような配慮をお願いしたい。

以下、それぞれの日本史の試験について検討した結果を申し述べる。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

日本史A

「日本史A」について、設問数は大問5題、小問32題の構成で、小問数は昨年度と同数であった。出題範囲は幕末から戦後までであり、日本史Aの学習範囲内で適切な設定であった。ただ、幕末に関連する問題が1問と昨年同様に少なかった。今年は共通テスト2年目であり、昨年度同様に多様な史料を用いた出題が多くみられた。履歴書やパンフレット、グラフ、複数資料による資料読み取り、写真、年表などである。ただ、地図を用いた出題は昨年同様見られず、空間認識を問う観点からの出題が不足している。

出題形式別では、正文選択が8題、正誤組合せ問題が6題、年代配列が5題、人物・事項の組合せが4題、語句の組合せ、正文組合せ、誤文選択が各3題となった。語句の選択問題は出題されなかった。昨年と同様に組合せ形式の出題が多いことが影響した。また、昨年に比べ正文選択と年代配列などの従来のセンター試験で多く見られた形式がそれぞれ増加した。年代配列は因果関係や年代ごとの理解によって受験生に正答を選ばせることもでき歴史的な思考力を問う問題として適切な形式である一方で、今年の出題の中にはやや細かい知識を問うものもみられた。

時代別では、時代横断型の出題が11題と最も多く、時代ごとの知識・理解を基に、各時代を比較して多面的・多角的な視野から思考し、判断する力が求められた。各時代を問う問題では、幕末の出題では1題、明治の出題では5題、大正の出題では2題、昭和の出題では7題、戦後の出題では6題であった。昨年に比べ、戦後期に関する単独の出題が増加し、日本史Aの学習範囲からの出題バランスとして適切である。例年みられた戦前期に偏った出題でないことで、戦前と戦後の関係性を問えている。一方で戦後期は一部平成までが出題されていて、受験生にとっては苦手な時代からの

出題になったと思われる。

分野別では、多分野に跨る混合問題が12題であり、分野ごとの知識を理解した上で、各時代を多面的・多角的な視点で概観する力が求められた。各分野を問う問題では混合問題も含めると、政治が13題、社会経済14題、軍事外交11題、文化が6題であった。今年度は政治・経済両分野からの出題が多かった半面、文化分野からの出題が少なかった。軍事外交分野は昨年と同程度の出題であった。昨年に比べ文化分野の出題は大きく減少し、やや偏った出題であった。以下、詳細を見ていくものとする。

第1問は履歴書とパンフレット、会話文を用いた明治～昭和戦後の総合問題であった。問1は正文選択問題である。会話文中の「当時」がいつかを判断した上で選択肢を見ていく必要があり、思考力を問う問題であった。しかし、時期の判断ができてしまうと①～③は時代がずれているため、知識だけでも解答可能になる。問2は語句の組合せ問題であった。会話文と履歴書から時期を判断しながら解答していく形式であり、単なる知識問題でなく資料活用をしていく点から共通テストの趣旨に則った良問である。問3は正文選択問題。史料と下線部「第一次世界大戦が終わった頃」「満州では軍人の身分を隠していた」の箇所を参考にしていく。シベリア鉄道の着工年については授業では扱わない場合も考えられ、やや深い知識であったが、シベリア出兵については判断がしやすかった。Xは会話文中の下線部「軍人という身分を隠していた」という箇所が資料Xの「表面軍衛との関係を断ち」という箇所と合致し、満州で行われた測量についてと判断ができる。X・Yの史料とも受験生にとって初見史料であり会話文の内容を関連づけて解答していくため、受験生にとっては難問であったと考えられる。問4は戦後の日米関係についての年代配列問題。各文を用語で判断するのではなく日米安全保障条約の内容から時期を判断していく良問であった。問5はパンフレットという資料に関連した正誤の組合せ問題。ただしパンフレットの内容ではなく、用語から知識を問う形であり、資料を用いた形式でなくても成り立つ問題である。Xについては1935年時点の日本と満州の関係性が問われ、Yでは京城という都市について問われた。京城はやや詳しい事項といえ、朝鮮総督府に関する知識と合わせることを要求されやや難しい。このような地名に関する問題であれば、地理的把握を問いやすいため地図を用いた出題も考えられる。問6は正文選択問題。大卒男性の初任給と耐久消費財の価格と世帯ごとの普及率に関する表を活用して解答する。選択肢の前半部分の出来事について時期を判断する必要がある。後半部分は表から読み取る形であり、知識と技能を同時に活用する良問である。問7は誤文選択形式で明治期と戦後期の内容の正誤を判断する問題であった。第1問全体を通じて、「時期」を会話文や資料から判断し、選択肢と照らし合わせる必要のある問題が続いた。史資料活用の視点として「時期」に着目させる指導が求められているものと受け止める。

第2問は日本とハワイとの関係に関する会話文からの出題であった。問1は文章から該当する地名や人物を選択する問題であった。会話文に「幕末になるにつれて、日本と海外諸国との交流が活発になる」とあるが、これに関連した設問として、江戸時代初期以来の出島での通商があったオランダを取り上げたのはやや不自然であった。幕末に薩摩・長州に接近したイギリスや、幕府を支援したフランスなどを題材とした出題も考えられよう。問2は史料文の読み取りと同時期の出来事の正文組合せ問題。史料文の読み取りは丁寧に読み取る事でa・bの判断ができる。日清修好条規の内容に関する選択肢も琉球漂流民殺害事件の時期がずれていることが判断できれば解答でき、基本的な内容である。二つの条約の違いや共通点に言及する設問があっても良かった。問3は日清戦争までの出来事の年代配列問題。短い期間での外交について年代判断が求められ、日本史A受験生にとっては難しく感じた問題と考えられる。ただし、Ⅰ天津条約で日本が相対的に勢力を失う一方、Ⅲ防穀令など不平等な貿易を通じた圧迫が続き、Ⅱ甲午農民戦争を背景にした日本の出兵を間接的

にイギリスが条約を結んで黙認することが日清戦争の開戦に影響を与える、という時代の流れが掴めていれば正答に到達できる良問である。問4は2つの史料文を読み取り、正誤の組合せを判断する問題。Xに関しては史料2を読み取ることで平易に判断ができる。Yに関しても史料3を丁寧に読み取ることで判断ができる。初見の史料を活用する形式の大問であったが、従来のセンター試験に見られた形式の問題が比較的多く、受験生にとっては解答がしやすかったと考えられる。

第3問は明治後期～昭和初期にかけての社会と生活に関する問題であった。問1は労働運動・社会主義運動に関する年代配列問題。各文とも基礎的かつ社会史の中で重要な内容を簡潔に問うている。問2は史料を読み解き、選択肢を照らし合わせて思考する正誤組合せ問題。Xは工場法の対象を知識として把握した上で、人力車夫が対象ではないことを判断する。Yは資料の最終段落から判断できる。問3は2つの表の読み取りから正文選択をする問題。各選択肢の前半部分は表の読み取りであり、後半部分は時期から当時の背景を考察するという形式で、資料活用と知識活用を同時に求められ複合的な問題である。しかし、第1問の問3で扱った時期とほとんど重なっており、作問上の配慮がほしいところであった。問4は内閣と事項の組合せ問題で、基本的な内容を問う問題であった。問5は1920～30年代の生活・文化に関する正誤の組合せ問題。内容としてはX・Y共に平易であり、Yの大衆娯楽雑誌から『キング』が想起できる。問6はメモからグラフを読み取る問題。複数の資料活用という点で、共通テストの趣旨を踏まえた良問である。昨年も大問1問4で同様の形が出題されていた。問7は明治後期から昭和初期にかけての社会に関する正文選択問題。従来のセンター試験で頻繁に出題されていた形式の、知識から正誤判定をする問題であった。用語のみの知識では判断できず、当時の社会状況の理解が求められ、受験生にとっては難しかったであろう。

第4問は鉄道の歴史とその役割に関して社会・経済を中心とした問題であった。問1は文章内の空欄に入る語句の組合せ問題であり、基本的な問題といえる。問2は太陽暦に関する資料と時刻表の資料から出題された。資料の読解と当時の社会に関する基本的な知識を組み合わせる問題であった。2つの資料から時期を読み取ることでa・bの判断ができる。問3は鉄道の旅客輸送と営業距離の推移に関する資料を読み取り、誤文選択をする問題であった。資料の読み取りと要因となる時代背景として知識が求められた複合的な問題であり、共通テストの趣旨を踏まえた良問であった。ただし、日本史Aの受験生にとっては社会経済史の内容で正誤判断が求められた点が難しかったと考えられる。また、時代横断型である点も判断が難しくなる一因だったであろう。問4は、「鉄道に関わる諸政策・事件」としているが、鉄道そのものの歴史に注目するのであれば、アメリカ鉄道王のハリマンや、満鉄の利権を得るきっかけとなったポーツマス条約などについて触れる方が自然であった。Ⅰ～Ⅲの選択肢は年代的には十分判別しやすいが、鉄道の歴史とその役割というテーマにあまり関連しない知識を問う問題になっている。問5は写真と関連する人物・事項の組合せ。資料から出来事と関連する同時期の知識を判断することが求められた複合的な問題であった。また、問題文の「1945～55年」という箇所にも着目し、出来事とその社会背景を理解しておく必要があった。Yの松川事件は写真の様子と「松川駅」から判別できるが、Xの写真とキャプションから戦後の買い出しを想起することが難しく消去法でaを選ぶ受験生が多かったのではないかと思われる。写真を用いた出題は画像資料だけでは判別しにくいものが多いので、リード文やキャプションを工夫して受験生が思考判断するに十分な情報を提示されるようお願いする。問6は表を参考に正文選択をする問題。受験生にとって苦手と思われる戦後史の出題で、なおかつ各文の出来事がいつ起きたかを理解しておくことが求められた。問7は正誤の組合せ問題。小泉純一郎が文章内に出てきて、2000年代の出来事も出題されたという点は日本史Aの特性から考えれば、評価されるべきであろう。今後も昭和だけでなく、平成期も出題は増えていくことが考えられ、現代史の指導について十分に見通しをもって行うことが求められる。

第5問は昭和期の政党政治と社会に関する問題であった。問1は近代の選挙制度に関する人物と事項の組合せ問題。X・Y共に重要事項が問われた。しかし、Xに関しては昨年も第3問の問5で問題となっている内容であり、2年連続での出題は避ける工夫がされると良かった。問2は総選挙結果の表を参考として無産政党の動向に関する知識を問う正誤の組合せ問題。無産政党の名称を知っているかが問われているが、やや深い知識であり、難しい。問3は五・一五事件と関連する史料についての正文組合せ問題。五・一五事件の結果についての説明文は平易であったが、史料の読み取りは史料本文だけでなく出典の時期まで確認する必要もある問題であった。問4は学問や思想の弾圧に関する正文選択問題。形式は従来のものであるが、受験生が苦手とする内容であり、知識の判断に迷う部分もあったと考えられる。問5は近衛文麿内閣の出来事の年代配列問題。Ⅰ～Ⅲは短い期間のものであり、判断を難しく感じる受験生もいただろう。日頃から年代としてだけでなくそれぞれがどの内閣の時の出来事であるかという政治の流れを意識した学習が求められた問題であった。問6は敗戦までの状況調査のために用いる史料として適切ではないものを選択する問題。歴史総合や日本史探究において生徒自身が課題意識をもち学習を一層深めるといった状況を想定した問題であり、共通テストならではの出題で良問といえる。歴史総合のサンプル問題の中でも類似した形式の問題がみられた。今回は時期に留意しながら思考すれば判断することが求められた。問7は敗戦後の総選挙における政党政治を戦前からの変化という視点で正文を選択する問題。単独の知識では解答ができず、複数の知識を照らし合わせ、判断をしていかなければならず、戦後史の学習自体が十分でない受験生もいる中で、戦前と戦後の知識を比較し、変化について思考するという点で難しかったと思われる。

日本史B

「日本史B」について、設問数は大問6題、小問32題の構成であった。共通テストに移行した昨年度と同様の問題数であった。出題範囲は古代（飛鳥）～現代（昭和戦後）までであり、古代の範囲として縄文・弥生・古墳から出題がないという点は注目すべきであるが、日本史Bの学習範囲内で適切な設定であった。今年度の特徴として、昨年度に引き続き従来の文章題が減少し、授業内のプレゼンテーションやレポート課題などの生徒の学習環境に即した問題設定を意識した内容が盛り込まれていた。特に大問1のように直接授業内では触れない歴史的な視点について取り上げ歴史的解釈を体験させながら解答させる試みは、受験生に対して、暗記に終始しない思考する力の必要性を投げかけるという意味でメッセージ性の強い問題になっていた。

出題形式別では、正文の組合せ問題が7題、年代配列問題、正誤の組み合わせ問題が各6題、人物・事項の組み合わせ問題が5題、正誤問題（正文選択）、正誤問題（誤文選択）が各3題、語句の組合せ問題が2問であった。昨年同様に大学入試センター試験では各大問に設定されることの多かった語句の組合せ問題が2題と少なく、大学共通テストの特徴になったと考えられる。一方、年代配列の問題が昨年4問だったものが6問と増加し、各大問に1問は出題されている。

時代別では、過渡期を問う時代横断型の出題が15題と最も多く、時代ごとの知識・理解をもとに、各時代を比較する複合的な視野が求められた。各時代を問う問題では、古代の出題では飛鳥・奈良・平安各1題、中世の出題では院政1題、室町2題、近世の出題では江戸6題、近現代の出題では幕末1題、明治5題、昭和（戦前・戦中期）1題、昭和戦後以降3題であった。例年と同様、各時代の特徴を端的に理解し整理する力が求められた。今年度は時代横断も含め、旧石器・縄文・弥生・南北朝からの出題がなかった。次年度以降も引き続き、出題する時代の均衡が保たれるような配慮をお願いする。

分野別では、複数の分野にまたがる混合問題が16題と最も多かった。今年度は中世・近世からの

出題が社会経済の分野に偏っていたこともあり、社会経済の問題の出題が16問と最も多かった。近世の出題は大問自体が「近世の身分と社会」がテーマであり偏りが出やすい設定ではあるが、他の大問でも出題された資料に社会経済を問いやすいものが多かった。各分野を問う問題では、混合問題も含めると、政治が13題、社会経済16題、軍事外交が10題、文化が10題、混合が15問であった。今年度は社会経済に関連する諸資料が出題されたこともあり、大問1以外での政治史の出題が少なかったのが特徴であった。全体的に特定の分野に偏らない出題となり、従来の時系列に即した歴史学習だけでは対応しにくい諸資料の読み取りから社会経済的な背景を読み取らせる問題が多く出題されていた。以下、詳細を見ていく。

第1問は日本の「人名から見た日本の歴史」に関するテーマ問題である。会話文Aでは「姓と苗字の違いについて」取り扱っている。高校生同士の会話をリード文に「姓」と「苗字」の違いに関するメモがまとめられ、小野妹子と豊臣秀吉の呼び名について例示することで話題を展開している。歴史用語としての暗記学習ではなく、学習する中で疑問に思ったことを自ら深めていく学習のプロセスを要約したような今回の問題設定は、共通テストの趣旨に合致したものであり意欲的な作問であると同時に、新科目「日本史探究」において示されている時代を通観した問いを立てることに根拠はつながっている。小問レベルでは出題されなかったが、会話文で展開されているように明治の民法や戦後の民法などに関連する出題があると、歴史的事象が現代社会を生きる私たちにもつながっていることを示すこともできるようになる。これは新科目「歴史総合」が目指しているところにもつながってくる。問1は問題形式の分類上は空欄補充であるが、既習事項である歴史用語を選択するのではなく、会話の文脈とメモの資料を参考にした受験生の思考を求めている共通テストらしい問題であった。会話文とメモ資料を丁寧に読み取らないと正答を選択し難く、一問目から混乱する受験生も少なくなかったと思われる。問2はXの説明文で木曾義仲を、Yの説明文で足利氏を読み取らせる組合せ問題であった。Xは「信濃」という地名から木曾義仲、Yは「所領の地名を苗字」から足利氏を想起させる問題で、地理的な空間認識を間接的に問う問題であった。普段の学習から地図を用いて地名との由縁について触れる学習が求められている。問3は年代配列問題で「近世に活躍した人物」という会話文からは独立した問題となっており、各文の関連も薄く個別知識をとという問題で唐突な印象を受ける。年代配列は解答を導く上で因果関係や、時代の前後関係が手立てとなるような出題が望ましい。会話文Bは嵯峨天皇を中心とする略系図を資料に子供の名前のつけ方に着目させ考えさせる問題である。問4は既習事項である嵯峨天皇による宮廷の唐風化についての知識と、家系図から読み取った情報で正しい組合せを選ぶことができる。選択肢のa、bの和風・唐風という内容は家系図から読み取らせるのが厳しく単なる知識問題になってしまっている。平城天皇と嵯峨天皇、淳和天皇が家系図上に並ぶのであれば、「平城大上天皇の変」や「承和の変」について触れた方が資料を生かした問題を作成できたと考えられる。問5は「名前」に関連した近現代の身近な話題からの出題で、自分たちの身の回りの生活の歴史の影響があることに気づかせる、優れた設定の問題だといえる。ただし、西暦順に名前が並ぶ一方で、そこからX・Yの説明している時期を推定するためには、ある程度の年代の暗記が求められる。特にアメリカ・イギリスとの戦争が1940年代であることは45年の終戦からある程度推察できるが、大正から昭和に元号が変わるのが1926年であることを知識として求めるのは難しい。関連する年表や他の資料と合わせて思考を促す工夫をしてほしい。問6はまとめの問題のような設定でありながら、解答するうえで参照する資料は1ページ目に掲載されているメモだけであり、誤選択肢とされているdの「啓蒙思想の普及を図るため」という内容も、誤りとは判断しにくい出題となっている。大問の最終問でまとめるのであれば、もう少し他の資料にも触れた作問をお願いしたい。

第2問は古代の法整備と遣唐使・遣隋使に関連する出題である。遣隋使・遣唐使の変遷と日本と中国王朝の法典編纂について年表が提示され、高校生が資料に基づいて思考をめぐらせていく形式で作問されている。問1は教科書にも簡単に触れられている600年の遣隋使についての問題であった。歴史解釈や歴史的な視点の多様性について触れられると共通テストの趣旨に即した問題に成り得た出題であった。実際正答を導くためには五世紀の倭の五王の時代以来中国王朝と冊封関係になく、約100年ぶりに遣隋使が派遣されたという知識を必要としている。しかし実際に教科書に6世紀の100年間に中国との関係がなかったことを説明した記述は少ない。資料や年表中の読み取りが生かされるような工夫があると良かった。問2はそれぞれ仏教に関連する人物と文化物で組み合わせる問題。来迎図や曼荼羅は用語だけではなく、絵画資料として提示されると普段の学習から資料集など視覚的な資料を学習する習慣がつけやすくなるだろう。問3は戸籍を資料にした問題。共通テストらしい読み取り問題であるが、受験生が処理する情報量が大きすぎる。約1ページを必要とする資料を題材とする場合、「そこから読みとれる内容の問題」「その資料そのものを知識で問う問題」と複数出題されれば受験生の負担が小さくなるだろう。問4は問題文中に「十七条憲法」「養老令」「延喜式」と出されているため判断し易くはなっているが、Ⅱが「国造」という用語から改新の詔以前であると判断できるもののⅠとⅢを判別する材料が少ない。Ⅲの文中「令条の期」とあることから既に「令」が存在し、その内容を補足しているという読み取りから「延喜格」とであると判断はできる。しかし、養老律令が大宝律令の後あまり時期を置かずに編纂されていることや、それ以外の史料中の文言に大きな差異が見られないことを考えると、受験生に判別させるのは難しい。教科書にも記載ある史料とはいえ、文面を暗記していなければ解けない問題は避けていただきたい。問5は大問2のまとめとして年表を振り返る構成となっているものの、「天皇の代替わりに律令が編纂されているわけではない」ことは、史資料やここまでの問題を見ずとも解答できてしまう。ここまで用いた史資料を活用して新たな問いを考えさせるなど思考を促す作問を期待したい。

大問3は中世の海と人々の関りに関する出題である。テーマにもあるように社会経済が中心の出題であった。問1は「倭寇」についての知識を問われる問題となっているが、大問3のテーマ全体に関連する内容であることを考えると、最後の小問に配置することが望ましいと考える。ただ、選択肢の内容は倭寇に関するもの以外は時代を通観するような抽象的な表現で、時代背景や社会情勢を俯瞰して把握する力を問われている。普段の授業でも個別の知識だけでなく、一定の期間を概観する歴史的な視点を育成する必要性を示している。問2は「海上交通の動向」を問うているようで実際は各文頭の「毛利輝元」「重源」「平忠盛」の時代並び替え問題となっている。人物名ではなくて歴史的な事象やその変遷から年代の配列が思考できるような出題の工夫をお願いします。問3は「馬借」についての典型的な出題内容であった。普段の授業から資料を活用して視覚的に認識させる必要がある。大問3のテーマが「海」に関連することや共通テストの思考を促す狙いを考えると、「馬借」を扱うのであれば教科書的な知識の確認だけではなく、琵琶湖を水運として活用する日本海側からの流通経路や、近江の大津や坂本が陸路としてなぜ要所になるのかを地図を用いて考えさせる問題にしても良かった。問4は史料の読み取り問題で、共通テストらしい問題であった。史料を踏まえて当時の貿易に関して考えさせる問題で、既習事項と初見資料からの読み取った知識を求める良問であった。授業内でも単に史料を読ませるだけに留まらず、そこから教科書の知識や授業の内容に関連付けて整理する考え方に慣らしておく必要があるだろう。問5は説明文と地図中の場所の組合せを問う問題であった。Xの文中の「和人」「館」などから十三湊や安藤氏を想起でき、蝦夷地であると判断できる。Yの文中の「元軍」から北九州方面だと判断できる。文章の内容に基づいて思考する必要があり、良問であった。

大問4は近世の身分と社会についての出題である。生徒のメモ・複数の資料で構成され社会経済

中心の出題であった。問1は大問全体のテーマに関連する問題であるが、メモの内容に関連なく知識を問う問題となっている。問2も近世の芸能・文化に関連する年代配列で歌舞伎をテーマにⅠ～Ⅲが説明されているが、「東洲斎写楽」「出雲阿国」「初代市川団十郎」の名前の年代配列になってしまっている。知識を踏まえながらも、歌舞伎の変遷を社会背景や文化的特質を踏まえて問うて年代を判断させるような形式の問題を希望する。特に文化史に関しては他の分野以上に暗記一辺倒の学習に終始する傾向がある。知識の定着は必要不可欠ではあるが、そこに様々な背景があることを意識づけさせる授業展開やそれを踏まえた入試問題の作成も、思考を促す学習をさせるうえでは必要不可欠である。問3は複数の史料からX・Yの正誤を問う問題である。複数の史料を活用することで思考が深まるが、この問題は史料相互の関連性が薄く、それぞれの正誤を組み合わせるだけになっている。史料を関連付ける工夫があるとなお共通テストの趣旨に即した出題になったと考えられる。問4は史料の読み取りとリード文に書かれた年代を手掛かりに政策を選択する問題であった。史料の読み取りがやや難しいが丁寧に読み取ればa・bの正答は選べる。しかしc・dの正答を選択するには問題文の「1836年」から「人返しの法」を選ぶ必要がある。誤選択肢となった「人足寄場」も無宿人の職業訓練を行っていたことを考えると、寛政の改革と天保の改革の年代を覚えているかどうかを問う問題になってしまう。問5は「御目見得」と「御家人」の違いに関する知識の有無が問われているだけの問題となっている。そのほかの選択肢も職人・百姓・えた非人についての定義が問われている。

大問5は日本とハワイの関係についての出題である。問1は文章から該当する地名や人物を選択する問題であった。会話文に「幕末になるにつれて、日本と海外諸国との交流が活発になる」とあるが、これに関連した設問として、江戸時代初期以来の出島での通商があったオランダを取り上げたのはやや不自然であった。幕末に薩摩・長州に接近したイギリスや、幕府を支援したフランスなどを題材とした出題も考えられよう。問2は日本とハワイの外交文書資料を基にした出題であり選択肢a・bの判別は資料読み取りであるが、選択肢c・dに関しては日清修好条規の知識問題となっている。二つの条約の違いや共通点に言及する問題があっても良かった。問3は朝鮮に関する日清間の対立に関する問題。10年間という狭い期間の出題で難しいが、Ⅰ天津条約で日本が相対的に勢力を失う一方、Ⅲ防毅令など不平等な貿易を通じた圧迫が続き、Ⅱ甲午農民戦争を背景にした日本の出兵を間接的にイギリスが条約を結んで黙認することが日清戦争の開戦に影響を与える、という時代の流れが掴めていれば正答を選べる良問である。ただし、もう少し年代に幅を持たせた方が受験生は判別しやすくなる。問4は独立した二つの史料の読み取り問題である。複数の史料を用いるのであれば、関連させた作問を希望したい。

大問6は鉄道の歴史と役割に関連する出題である。中間Aでは明治期から戦前までの時代を扱った。問1はリード文中の空欄語句補充問題であった。しかし、空欄前後の文脈から語句を判別できるので、暗記に頼る問題とは異なる。問2は二つの資料の日付を参照して判別する問題であり、資料の情報を処理する力が試される良問であった。既習の知識を問うのではなく、資料から読みとれる内容を問うている。問3は表の情報を丁寧に確認することが求められる。また、日本鉄道会社の設立背景や時期を踏まえれば、官営事業の払い下げを受けられる後の財閥のような大規模な企業ではないことも判断ができる。日本鉄道会社という知識は必要であるが、そこでの既習事項と社会背景を根拠に正答を選ばせる良問である。問4は、「鉄道に関わる諸政策・事件」としているが、鉄道そのものの歴史に注目するのであれば、アメリカ鉄道王のハリマンや、満鉄の利権を得るきっかけとなったポーツマス条約などについて触れる方が自然であった。Ⅰ～Ⅲの選択肢は年代的には十分判別しやすいが、鉄道の歴史とその役割というテーマにあまり関連しない知識を問う問題になっている。問5は写真と関連する人物・事項の組合せ。資料から出来事と関連する同時期の知識を判断

することが求められた複合的な問題であった。また、問題文の「1945～55年」という箇所にも着目し、出来事とその社会背景を理解しておく必要があった。Yの松川事件は写真の様子と「松川駅」から判別できるが、Xの写真とキャプションから戦後の買い出しを想起することが難しく消去法でaを選ぶ受験生が多かったのではないと思われる。写真を用いた出題は画像資料だけでは判別しにくいものが多いので、リード文やキャプションを工夫して受験生が思考判断するに十分な情報を提示されるようお願いする。問6は表と年表を丁寧に読めば正誤の判断が付けられる。ただし、「大宮」という地名が「首都圏」であることに気づけなければならない。関東圏の受験生にとっては違和感ないが、そうではない受験生が「大宮＝埼玉の地名であり首都圏である」と判断できるかどうかは難しい。少なくとも日本史Bの学習で「大宮」を首都圏である埼玉県の名として扱うことはないだろう。問7は戦後政治史の正誤問題で小泉純一郎の知識が問われた。内容の民营化事業は1980年代だが、今年の受験生が生まれてから首相になった小泉純一郎が出題されている。

3 ま と め

今年度は、大学入学共通テスト2年目とはいえ、いまだに共通テストの傾向を掴んでいるわけではなく出題の形式や内容をめぐり、教育現場も期待と不安とが交錯する一年であった。

「日本史A」は全体を通じて昨年同様に史料や表、グラフなど多様な資料を活用し、思考・判断させる意図がみえる問題が多い構成であった。昨年一部にみられた、受験生の学習範囲からは解答しにくい知識問題も極力避けられていて、学習到達度をはかるために適切な難易度であったといえる。ただ、年代の暗記や史料から年代や時期を判断することで正答を導くことのできる問題が多かったことは、出題の手法パターンとしては今後工夫していく必要がある。例えば複数の史資料からわかることを根拠とした歴史に対する考察を選択する形式や、今回出題されたような資料と当時の背景に関する知識を同時に活用させるといった形式は思考力・判断力を問うために適している。文化史に関する出題が減少していることについては、出題分野のバランスの観点から改善されることを期待している。共通テスト2年目で資料活用から思考・判断する問題が次年度以降も出題されることで、教員にとっては指導の方向性が、受験生にとっては学習の方向性が明確になっていくと考えられるため、今後も構成上の継続をお願いする。

次に「日本史B」は全体を通して、各分野の特徴を網羅した内容であり、文章の読解力を重視した出題を維持しつつも、図版・表・史料といった豊富な資料を昨年以上に活用し、思考・判断につなげる出題が多く見られた。受験者及び指導にあたった教員にとって、不易と流行の均衡のとれた出題であったように思われる。ただし、資料活用に主眼が置かれ過ぎ、受験生の負担が大きくなっているのも事実であり、日本史Bの学力を測るに適切な分量になるよう均衡をとっていただきたい。また、史料読み取りとはいえ歴史的な知識よりも国語的な読解を必要とする問題も含まれ、教科の専門性も十分に発揮できるよう出題形式の工夫をお願いする。時代による出題に偏りは今年度も見られた。特定の時代に出題が集中しないように引き続き配慮をお願いする。特に、次年度は原始・古代（旧石器・縄文・弥生・古墳等）、中世（南北朝）からの出題が増えることに期待する。また出題形式について、年代配列問題が昨年より増加していたが「人物」や「出来事」の暗記に拠らなければ解けない問題も散見された。思考・判断・表現を基礎とする学習によって解くことができる設定をお願いする。また次年度以降も、選択肢の分散にも留意されるようお願いする。

なお、毎年のように述べていることではあるが、「日本史A」「日本史B」の科目としての性格の違いを考えれば、共通問題の出題はできるだけ避けていただきたく、引き続き検討をお願いする。